

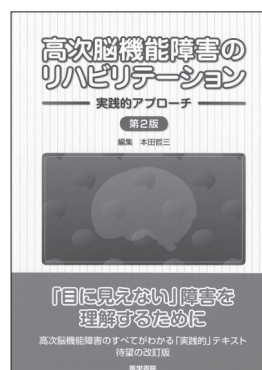


本田 哲三●編

『高次脳機能障害のリハビリテーション 第2版 実践的アプローチ』

書評者

小川 恵子（聖隷クリストファー大学／リハビリテーション学部長）



本書の初版（2005年）が出版された後、2006（平成18）年の診療報酬の改定時には、リハビリテーションの長期にわたる継続が制限される中、高次脳機能障害は継続的なリハビリテーションが必要な障害と認められた。つまり国ですら、この障害が日常生活に与える影響は大きく、長期に適切なリハビリテーションを行うべき障害であると認めたといえる。当然、そのアプローチは、エビデンスをもった効果的なリハビリテーションであるべきであるが、高次脳機能障害の症状は多様で、さまざまな職種が手探りで個別に対応していたのが現実であったと思われる。

そこで、現場のセラピストたちが実践の手引き書として活用できると感じたのが本書であった。診断の基準、評価の視点、日常生活の状態に合わせた

対応と復職に至るリハビリテーションプログラムが具体的に提示され、「見えない障害」をどのようにとらえ、支援を行うかについて、即運用が可能な内容で、しかも読みやすい文章で紹介されていた。これは、医療福祉に携わる人間だけでなく、障害をもつ対象者の家族にも高次脳機能障害に対応する道標になったのではないと思われる。しかしながら、高次脳機能障害の研究の発展は著しく、発刊から5年が経過して、その記載された知見に付け加えて他書を参考にすることがあったのは否めなかった。

そしてこのたび、第2版が出版された。今回の改訂版は、高次脳機能障害の研究からの最新の知見が加筆修正されただけではなく、薬物療法や高次脳機能障害をもつ対象者の社会参加における困難さについて、さまざまな調査

結果から解説されており、総合的な視点からのアプローチが示唆されている。これらの改訂は、今まで個別に書物を探し1つ1つの問題を理解しながら治療や対応を進めてきたがために、つながりのない断片的なアプローチになりがちであったこの障害への対応を、1つにつなげる役割を果たすことができるのではないだろうか。その意味で、本書は入門書でありながらも、同時にベテランのセラピストにも参考となる実践の手引き書として、再度生まれ変わったといえよう。ぜひ手に取っていただきたい1冊である。

B5 頁272 2010年 医学書院刊
定価4,200円（本体4,000円＋税5%）
[ISBN978-4-260-01024-5]